

(別紙2)

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 青山慶

青山論文は、言語習得以前の乳児と養育者の初期コミュニケーション成立過程を明らかにすることを目的とする6つの章からなり、理論的検討の前半と実証研究の後半に分かれている。

第1章と2章では論文が背景とした理論的立場が検討されている。

第1章では、従来の初期コミュニケーションの発達論である有機体論や記号情報伝達論を展望し、それらが発達原理の二分法（遺伝・生得性と社会的学習など）を前提として採用し、行為過程に言及することが少なかったとしている。それに対して、近年、他者とのコミュニケーション行為を環境との絶え間ない調整と見なす生態学的観点が主張されているとしている。

第2章では、19世紀にはじまる発達研究にシステム論を導入したとされる Gilbert Gottlieb (1929-2006) の研究と理論を検討している。Gottlieb は30年に及ぶ水鳥（マガモ）の研究から、孵化直後のヒナにみられる母鳥の鳴声への強い選好性が、1秒あたりの鳴き回数の分布幅が大きく不安定な、孵化前のヒナ自身や同時期に孵化する他のヒナ達の鳴声の聴取経験によって生じていることを一連の実験で明らかにした。そこから「初期コミュニケーションシステム」という枠組を提案し、決定論的立場とは異なる「蓋然的後成説 (probabilistic epigenesis)」にまとめた。それは非自明性を特徴とすることとして経験の意味を再定義することであり、行動を通して環境に資源を発見する探索の重要性を示すものであったとしている。

第3章から5章では、積木遊び場面での初期コミュニケーションが母子の事例に観察され、検討されている。

3章では、6か月から16か月齢までの乳児と母のやりとりの縦断的データから、母が積木を積み上げ、子が崩す54回の「積み-崩し」イベントを抽出し、崩れが、偶然の接触による「偶発型」、手の軌道が意図的と見なせる「完了型」、崩れに引き続いて他の行為が開始する「接続型」に分類できること、そして7か月齢に多い「偶発型」から8か月齢になり増加する「完了型」への変化が、「積み-崩し」の過程での母子のやりとりの多様化と行為の予期性をもたらしたとしている。

第4章では、さらに24か月齢までのデータを追加し、とくに母による積み方の調整を分析している。例えば、土台となる積木の選択、土台の位置決めや位置変更、積木の入れ替えなどが、子が積木と偶発的に接触することを避ける、行える動作を明確

化する、崩れ方を調整する機会を与えるなどのかたちで、結果として子と積木との接触を多様にすることを可能にしていたとしている。

第5章では、子と積木の接触を中心に分析し、接触する部位、手の形態や身体の動作、崩れ方などについて詳細に分類している。ついで3章以降のすべての分析を統合して、母子がペアで行った積木遊びのテーマが積木の崩れやすさ、積木の崩れにくさ、配置の再帰性、土台の安定性、接触する積木の塔の位置、接触の強度、塔の残り方の調整など多数に分化していったことを示している。そして、テーマの枝分かれが、母子による積木遊びの発達過程を特徴づけていたとしている。

6章では総括的議論が行われている。そこでは積木の意味が、反復する積木との接触による探索を通して発見された、行為的な枝分れとしての多義性であること、例えば、子の崩し方が養育者の次の積木の土台づくりに寄与するというように、積木を介した初期コミュニケーションの発達が、子と養育者と積木を要素とするシステムにおける共作用の結果であり、このシステムが新たな積木遊びの質の創発を導いた可能性があるとしている。

審査委員からは、神経科学や認知科学など発達研究の最新の知見を参照し、遺伝と環境など発達の2分法についての議論をより洗練させること、積木遊びの特殊性に十分に配慮して理論的考察を深めること、生態心理学での発達論と関連付けること、より多くの事例を加えることなど、今後の研究において検討すべき諸点についての指摘があったが、本論文が、理論を扱った前半と実証研究を行った後半において、オリジナルな観点と極めて精細な事実を提供しており、関連領域に高く貢献する内容である点で審査委員の見解は一致した。よって、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。